

学徒動員 学校の生徒らの動員も行われた。昭和一三（一九三八）年に各市町村に「挺身報国隊」が結成されると、青年団や青年学校、中等学校に「報国隊」ができ、応召軍人家庭への奉仕や台風災害復旧作業などに出勤した。同一六（一九四一）年には中等学校に「学校報国隊」が作られて、食糧増産作業のため農作業に出勤した。

中学生で年間五〇日以内、青年学校生では四〇日以内、国民学校六年生には二〇〜三〇日の農作業従事が課せられた。学校の運動場も食糧増産のために畑となった。これが翌年には日数が増え、昭和二〇（一九四五）年には根こそぎ動員がなされて農作業に従事した。



写真4-94 呉市の工場へ動員前の川之石高等女学校の生徒

（九）原子爆弾の投下 敗戦

昭和一九（一九四四）年一〇月には本土防衛圏の最南西端の沖繩諸島が、連合国の機動部隊によって攻撃を受ける。一一月に初の東京空襲が始まり、国民の中には戦局の悪化を感じる者が多くなる。同二〇（一九四五）年四月、連合国軍は沖繩に上陸し、六月二日には沖繩全島を占領する。制海空権が完全に奪われると、全国各地は毎日のように空襲を受け爆撃される。

そして八月六日には広島市に、九日には長崎市に原子爆弾が投下されて、両市で合わせて三四万人以上の死亡者と、その数倍もの負傷者を出した。一五日には、天皇の肉声吹き込まれた「終戦勅

語」がラジオ放送されて、三年九か月に及んだ太平洋戦争は、日本の無条件降伏で敗戦を迎えた。

三 昭和一八（一九四三）年の大水害

（一）二度の台風被害

この年の七月二日から二四日にかけての台風により、南予北部の八幡浜市・西宇和郡・喜多郡大洲町などは、猛烈な集中豪雨に見舞われた。戦争中のため、無計画な森林伐採や、銅山の廃棄鉱石の放置によって荒れていた山々が、集中豪雨によって地滑りを起こし、河川は決壊し、河川沿いの田畑や家屋が流されたり冠水したりして、大被害となった。この年は九月にも再び台風に見舞われて、被害が拡大した。七月の雨は、記録的な七〇〇ミリメートルを超す豪雨となり、市内の主な河川の千丈川・五反田川・喜木川・宮内川は全て氾濫した。

五反田地区は、元井橋から川が氾濫して千畳地区に流れ出し、清滝橋が流失した。千丈地区も、千丈川があふれて松柏から西は泥の海と化した。広瀬・古町などは床上浸水し、明治橋より下流の新川に架かる橋は全て流された。川下地域は水没する民家も出た。

また保内地区も同様な被害で、特にひどかったのは宮内・喜須来と日土村で、ほとんどの橋は流されて道路も切断された。喜須来村の須川地区では、鞍掛山（地元では大峰山と呼んだ）西側中腹で、三ヘクタールにわたって山崩れが生じ、下流を埋め尽くした（写真4.95）。日土村の梶谷銅山から出た土砂のたまり場が崩れて、喜木川を埋め大洪水となった。

松岡地区にあった村役場は、前の役場橋（現大正橋）が流れただけでなく、役場そのものが流失し、多くの重要書類を失った。ま

そのほかにも、越智郡瀬戸崎村や盛口村の若者たちが、磯津村中ノ谷の災害救援に駆け付けた写真が残る（写真集参照）。

（三）相川橋

喜須来村役場の前の喜須来橋も、この台風で最後に流された。時の県知事は相川勝六で、七月就任の初仕事は災害復旧となる。戦時下の働き手の足りない災害現場で、声をからし、指揮を鼓舞、自ら先頭に立って復旧作業に取り組んだ。

八月四日、相川知事は喜須来村役場を巡視した。その際、復興までに「向こう一〇日ほど」と考えていた岡鹿太郎村長に対して、知事は「五日間で完成するように」と激励した。資材不足の中、岡村長は昼夜を問わず率先して作業を進め、知事の指示通り僅か五日で架橋難工事をやり遂げたのである。相川知事は、岡村長の不眠不休の努力に対し、感謝と称賛の手紙を送る。岡村長もまた復興を記念し、内意を得て知事の名を冠し「相川橋」と改名したのである（注36）。



写真4-95 喜須来村須川公会堂付近の水害 1943（昭和18）年7月23日

た近くに止めてあった村唯一の自動車（オート三輪型小型トラック）も、六キロメートル下流の川之石町の美名瀬橋付近まで流された。川之石町の、海岸沿いの旧役場にあった私立川之石図書館も洪水によって水没、機能を全て失った。このとき、大洲・八幡浜地域では死者・行方不明者一三四人の犠牲者が出た。

（二）満州開拓青年義勇隊の救援

この水害で県庁や近隣の自治体から、復興応援部隊が駆け付けているが、戦争中のごとき優先して回せるような建築資材も物資もほとんどなく、復興には長時間かかっている。国を挙げての戦争の最中にあり、同年九月に起きた鳥取大地震（約一、〇〇〇人が亡くなる）とともに報道も控え目にされた。

そんな中、満州開拓青年義勇隊嫩江訓練所河原中隊が、渡瀬前（八月一日に救援に駆け付け、国鉄伊予平野駅で下車（ここから先は汽車は不通）、山越えをして喜須来村に入り、以降一八日までの間を、喜須来・宮内両村内の堤防の修理や、水田内に入った土砂の撤去、倒壊家屋の片付けなどに精を出した。当時一四〜五歳の若者たちであった。

（注1）得能盛儀（二〇二二）「得能重斯登（林次十郎）について」『八幡浜史談』四〇号 八幡浜史談会

（注2）木下博民（二〇一四）「評伝 林次十郎というよりも得能重斯登」『よこ』第一五号 西南四国歴史文化研究会

（注3）河野 茂（一九八六）「上甲振洋と西郷隆盛」『八幡浜史談』一号 八幡浜史談会

（注4）谷本 清（一九五八）「郷土史話百姓一揆」

（注5）保内町近代史研究会（一九九〇）『第二十九国立銀行と進藤放彦』保内町教育委員会

（注6）福井太郎（一九八五）「平田喜平と芝録郎（八幡浜商社）」『八幡浜史談』第一三三号 八幡浜史談会

（注7）清水 英（一九九八）『宇和島藩医学史』宇和島市医師会  
（注8）『八幡浜新聞』（一九七二）尾上悟様庵「八幡浜文化覚書」

### 第三節 高度成長から安定成長への 転換期の八幡浜

#### 一 オイルショック後の落ち込み

昭和四八（一九七三）年一〇月に中東戦争勃発によって急激な原油高となる。「第一次オイルショック」と呼ばれる事態が翌年まで続き、軒並み経営方針を縮小する企業が続出し、景気低迷の事態が起きた。昭和四九（一九七四）年のGNPは、戦後初めてマイナス成長となり、石油消費量を減らすために電力や石油の消費量を節約するという省エネや節約対策が急速に普及した。

オイルショックは、人々の生活にも大きな影響を与えた。トイレットペーパー買い占め騒動が起こり、一月には早くも県下ガソリンスタンドは、日・祭日休業、平日も午後六時までの営業となった。省エネや節約ムードから、マイカー規制、深夜テレビ放映の自粛などの規制が次々と打ち出された。

続いて昭和五三（一九七八）～五七（一九八二）年には「第二次オイルショック」が起き、再び日本経済に大きなダメージを与えた。しかし、これ以降、国の経済は比較的安定した低成長の時代を迎えた。

#### 二 南予用水事業

##### （一）昭和四二年大干ばつ

水を求めて 昭和四二（一九六七）年は、まれに見る大干ばつの年であった。特に七月から一〇月初めまでの約九〇日間雨らしい雨は降らず、八幡浜市役所は飲料水を、農家や西宇和青果農業協同

組合は農業用水を求めて大混乱に陥った。八月、雨を期待し上陸を願っていた台風も南予地方を避けて土佐湾沖で東に曲がって行った。

それほどまでの水不足であった。大島では既に六月には水道水がストップし、井戸水を飲料水にしたところ、集団赤痢が発生した。また、海岸部の柑橘園は次々と木が枯れていくという事態に陥った。ミカン農

家は、水でさえあれば、ジュース工場の廃液であろうと、冷房排水であろうと何でも集めて回り、朝早くから灌水の水を運搬して柑橘園の樹木に水をかけるのが日課となった。また農協も、事態を放置できずにさんざん手を打ったものの打開策は見つからず、井戸掘りをして僅かでも水を得ようと努力するのが精一杯であった。しかしながら、井戸も枯れ、果樹が枯死するのを食い止める程度で大きな被害が出た。八月三〇日には自衛隊の飛行機が南予上空で人工降雨のテスト実験を何度も繰り返したが、人工雨も降ることはなかった。上水道は八月に時間給水、九月早々には三割給水制限となった。

県はついに九月三日に干害総合対策本部を立ち上げ、一〇月三日には非常事態宣言を発令した。この声が天に通じたのか、一〇月五日にやっと二〇ミリメートルの雨が降り、人々は安どの声を上げた（注7）。



写真5-46 スモークミート工場の排水を受水して運搬（上）枯死寸前のミカン園（左）  
「命枯れるな」より